いのちと地域を守る

日本海中部地震 1983年5月26日

死者104人 津波が大半

能代西方沖100㌔から14分後に大津波襲来

海底を震源に1983年5月26日、マグニチュード（M）7・7の地震が発生し、秋田、むつ、深浦で震度5（当時の基準）を観測した。死者・行方不明者104人のうち、100人が津波の犠牲者だった。建物は全壊1884棟、半壊3515棟に上った。

震源が陸地に近いため、地震発生とほぼ同時に津波が日本海沿岸を襲い、被害が拡大した。仙台管区気象台は地震発生から14分後に大津波襲来と、浸水高は八峰町（旧峰浜村）14・93㍍、能代、八森町10・99㍍など。8・52㍍を記録した。

震源は能代市沖。男鹿市水族館の駐車場にスイスイスイと泳ぐ人の旅行客らが津波の犠牲になった。

県がまとめた沿岸津波実態調査報告書によると、秋田県は昨年12月、沿岸市町村の津波高と津波到達時間を公表した。

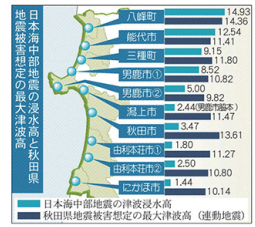
日本海沖での大規模地震を想定し、秋田県沖、新潟県沖で個々に地震が発生したケースと、連動したケースをシミュレーション。

3連動が起きた場合の津波の到達時間は、最大津波高は八峰町14・36㍍、秋田市13・61㍍、男鹿市（男鹿半島の先端）11・47㍍など。50㍍付近に4分、能代市14分、男鹿市に八峰町より分となっている。

想定日本海沖地震

3連動で高さ最大14メートル

日本海中部地震発生翌日に行われた行方不明者の捜索。津波の犠牲になった子どもたちが次々と運ばれた＝1983年5月27日、男鹿市の加茂青砂海岸



【注】数字の単位は㍍。日本海中部地震の浸水高は東北大津波痕跡データベースを参照し、秋田県地震被害想定のポイントと近い地点の最大値をグラフにした

■むすび塾に参加して――男鹿・荒町町内会

【災害への備え】日本海中部地震は半島の北側で津波が発生し、多くの犠牲者が出た。荒町がある南側は地震空白域とされるが、最悪の状況を想定して対策を施しておくべきだ。　＝小島肇さん（56）

【参加して】実際に被害に遭った方々の話や、地域の備えについての考えを聞けて良かった。今後もこういう活動があれば参加したい。　＝杉渕一さん（56）

【災害への備え】災害が起きる時期や時間帯によって、避難の状況は異なるだろう。冬場や夜間の災害で高齢者や子どもをどう安全に避難させるか。考えておく必要がある。　＝荒町町内会副会長・良塚洋さん（68）

【参加して】災害時には車での避難を想定していたが、混乱の恐れがあると聞いて考えさせられた。車の燃料を常に満タンにしておくことも大切だ。　＝荒町町内会副会長・目黒秀雄さん（67）

【災害への不安】日中は多くの人が仕事に出て、地域に高齢者が残される。自分も一人暮らしで、実際に避難できるか心配だ。事前に考えておかなければならない。　＝猿田トシさん（76）

【災害への備え】災害が発生した場合に備え、普段から近所の人と連携し、避難できるようにしたい。　＝小川誠さん（41）

【参加して】地域はこれまで防災の意識が薄かった。学んだことを参考に、町内で訓練方法の見直しなどを話し合おうと思う。　＝佐々木慎さん（48）

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には、地域の人、人と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。

第14回「むすび塾」は30日、石巻市鮎川小で開催します。

地域で退避ルール設定を

減災・復興支援機構理事長　木村　拓郎さん

東日本大震災では、避難誘導をやめるタイミングが問題になった。消防団員と民生委員合わせて300人以上が犠牲になったからだ。津波到達予想時刻の15分前には退避に移るなどのルールを決めず、固執してやめなければならない。

建築基準法が改正され1981年以前の建物は、大地震の度に被害が出ることも知っておいてほしい。築32年以上の家は耐震診断や耐震補強をするべきで、心配な人は行政に相談することを勧める。

本来の避難場所が遠いからといって違う場所で避難訓練するのは好ましくない。釜石では場所の統一で訓練を実施した結果、震災でもみんなが逃げ込み、多数の犠牲が出たケースがあった。

車避難は問題点もあるが、メリットも多い。避難タワーの建設を待つのではなく車を使う避難の計画作りや訓練に取り組んでほしい。

災害時は行政が機能せず、被災後の生活も大変な問題となる。震災では、自治体の枠を超えた連携が役に立った。他地域の町内会など、災害時の応援や物資支援の協定を結ぶことを提案したい。